高岡短期大学紀要　　第20巻　　平成17年3月
Bull. Takaoka National College, Vol.20, March 2005

英語教育プログラムとしての海外研修
――第2回ウェスタンオレゴン大学夏季英語研修報告※1

深　谷　公　宣*

要　旨

2004年8月から9月にかけて、本学は2度目の夏季英語海外研修を実施した。英語海外研修は本学における重要な教育プログラムである。そこで本報告では、英語教育という側面から研修を検討する。研修が成功であったかどうかは、学生の参加動機が満たされたか否かによって決まる。今回の研修では、今後修正すべき点が散見されはしたものの、事前研修や滞在教育機関であるウェスタンオレゴン大学の学習支援体制、授業・ホームステイなどの研修プログラムを通じて学生の動機は十分満たされ、結果として、本学海外研修の英語教育プログラムとしての有用性の高さが証明されるかたちとなった。次年度以降、内容の改善を伴った本研修の展開が期待される。

キーワード：　英語教育、海外研修、オレゴン、事前研修、授業、学外活動、アシスタント、ホームステイ

1　はじめに

高岡短期大学は今夏、友好協定校であるアメリカ合衆国オレゴン州ウェスタンオレゴン大学（Western Oregon University、 以下WOU）での、2度目の夏季英語研修を実施した。※2 研修全体の運営にあたったのは、協定締結に至るまでの現地調査や第1回夏季英語研修を担当した本学地域ビジネス学科小林和子教授であったが、英語海外研修の今後の展開のことを考え、今年度は本稿執筆者である同学科講師の深谷も参加し、新たな体制で臨むこととなった。

本学の英語海外研修はようやく2回実施されたに過ぎず、例年慣行される授業のひとつとして定着したとはいえない。そのため、さまざまな角度から研修を観察し、検討していく必要がある。今回新たに参加した筆者が、現地での授業参観・学外活動同行を通して把握した研修の内容をまとめ、ここに報告する次第である。

研修全体を眺めれば検討すべき事柄はいろいろあるが、本稿は特に「英語教育プログラムとしての海外研修」という側面に焦点を当て、具体的な内容に言及しながら、今回の研修が英語教育のプログラムとしていかなる役割を果たしたのか、という点について考察する。

結論からいえば、今回の研修も、前回同様、学生の参加動機を満たすに十分であり、英語教育のひとつのプログラムとして大きな役割を果たしたということができる。ただし、すべての面で満足のいく結果が得られた昨年と違い、今年は、教育プログラムという点からみて納得がいくとはいえないところも散見された。本稿ではそうした箇所についても触れながら、今回の研修が教育プログラムとしてどのように機能したのかを改めて検証し、次回以降の研修への展望を開きたい。

2　研修参加への動機と英語力

2．1　動機――英語コミュニケーション能力の向上と異文化理解

夏季英語研修は本学の教育プログラムの一環として位置づけられ、本科では「特別講義（英語海外研修）」として、専攻科では「海外研修」として開講されている。※3 参加者は、研修後に執筆するレポートの提出を含めた全行程を滞りなく修了すれば、本学の卒業・修了要件単位として4単位を取得することができる。

研修は学科・専攻に関係なく参加可能だが、本年度の参加希望者は地域ビジネス学科の学生のみとなった。内訳は、1年生15名、2年生1名の計16名である。

＊地域ビジネス学科

参加を希望した16名の学生のなかには、英語海外研修があるので本学に入学したという者も多数見られた。そのような者も含めて、学生は研修に何を期待し、どのような動機をもって臨んだのか。まずはその点を明らかにしておこう。研修が参加者の動機を満たすものであったかどうかは、研修の意義そのものに関わる大切な要素だからである。

参加希望者には昨年度同様、予め「英語海外研修参加希望理由書」の提出を求めた。この理由書には、海外研修に参加を希望する理由や、その経験をどのように生かしたいかについて問い、記入する項目が設けられている。その結果、主に次のような回答が得られた。《文化の違いについて学びたい》《英語で会話する能力を身に付けたい》《外国での生活や習慣を実際に体験したい》《今まで学んだ英語を海外で使ってみたい》《外国の方とコミュニケーションをとれるようになりたい》《趣味や仕事の幅を広げたい》《地域社会での活動に生かしたい》《今後の英語の学習に役立てたい》。

このような回答から勘案すると、学生は、将来の仕事・活動への一段階として研修を捉えつつ、英語コミュニケーション能力の向上と異文化理解・体験のふたつを主な動機として参加を希望した、ということができる。

２．２　英語力――学生の自己認識

しかしながら、英語でのコミュニケーション能力を向上させたい、異文化を理解し、体験したいといっても、その前提となる英語力には参加希望者個人の違いが存在する。そのため、参加希望者がこれまでどのように英語を勉強してきたのか、それにもとづいて自分の英語力をどう認識しているのかについても知る必要がある。参加者の英語力によって、コミュニケーション能力伸張の度合いや異文化理解の度合いも変わってくる。

「希望理由書」には、自分の英語力を5段階で自己評価する項目が設けられている。この5段階評価においては、5が最高、1が最低という基準のもとで、自分の英語力を5、4と回答した者は皆無、3が10名、2が2名、1が4名という結果が得られた。これらはあくまで自己の主観的評価であり、安易な一般化は避けるべきだが、ひとつの傾向としては参考になる数字だ。

3と回答した10名は、英語力に自信があると断言することまではできないものの、苦手意識は少なく、それなりの能力があることを自負している。一方、2、1と回答した6名は（目標設定が高すぎて自分の実力との乖離が大きいと感じていたり、世間的・社会的な評価を気にするあまり防衛意識が働いて実力よりも低い自己評価を下してしまったり、といった可能性はあるが）、概ね、英語に関して若干の苦手意識がある者だと考えてよい。参加希望者のなかには、英検準2級ないしは2級を持っている者、英会話学校に通っている者、高校のときに国際コースや英語コースだった者、中学・高校でも海外研修旅行に参加したことのある者が、それぞれ複数名存在したが、そうした経歴を持ちながら、2、1と回答している者も何名か見られた。そのような学生は、自分の英語学習歴が必ずしも実力と結びついていないという認識の持ち主だと考えられる。

２．３　動機と英語力にもとづく学生の類型

自分の英語力をどのように認識しているかによって、コミュニケーションをとろうという意識や、異文化を理解しようとする姿勢に個人差が出る。※4 ここでその意識の差、姿勢の差を、便宜上、4つの型に分類してみる。

（１） 苦手意識がないので、積極的に英語を用いる。
（２） 苦手意識はないが、そこで満足し、積極的にならない。
（３） 苦手意識があるので、それを克服するために、積極的に英語を用いる。
（４） 苦手意識があるので、積極的になれない。

コミュニケーション能力の向上、異文化理解という動機の満たされ方は、参加した学生が自分の英語力をいかに認識しているかによって、変わってくる。例えば、上記（２）にあてはまる学生が現地で使われる英語表現に接し、自分の英語力が確固たるものではないことに気づいて姿勢を改めれば、コミュニケーション能力の向上、異文化理解という動機が満たされる可能性が出てくる。あるいは上記（４）にあてはまる学生が、研修参加によって苦手意識を克服し、少しでもコミュニケーションや異文化理解への姿勢を積極的なものに変化させることができたら、その動機は満たされた、ということになる。

今回の研修は、参加者の動機をいかに満たしたか（あるいは満たさなかったか）。それぞれ違ったかたちであっても、結果として、各自の動機が満たされたことが確認されれば、今回の英語研修は本学の英語教育プログラムとして一定の役割を果たした、ということになろう。

以下、英語教育という点で今回の研修が果たした役割について、研修プログラムの実際を段階的に振り返りつつ、現場の視点から検証してみる。

３　研修プログラム

３．１ 事前研修

英語でのコミュニケーションや、異文化理解・体験には、ある程度現地についての予備知識が必要である。予備知識がなければ、現地で会った人々と同じ土俵で会話をすることが難しくなるからである。そこで今年度も、昨年度同様、アメリカやオレゴンに関する情報を予め学生に伝える事前研修が実施された。

事前研修は6月10日からスタートし、8月9日の結団式まで、毎回90分、計6回行われた。主な研修内容は、ホームステイ・ガイダンスやアメリカ・オレゴン事情の学習、旅行準備・渡航手続きについての指導である。

ホームステイに関しては、観光サービス業での勤務経験を持つ本学地域ビジネス学科渡邉康洋教授にレクチャーを依頼した。レクチャーでは「待遇は各家庭で異なる」「アメリカでは、ホストファミリーだからといって客に気を遣うことがない」「英語力が飛躍的に伸びることを期待してはいけないが、積極的に英語を使うか使わないかで、身につく英語力も変わってくる」「感謝の気持ちを大切に」など諸々の注意点が、学生に与えられた。小林教授からも、昨年度の経緯を踏まえ、ホストファミリーへのおみやげや学生たちが滞在先でできるファミリーへのサービス（日本料理を作る、など）について説明があった。

アメリカ・オレゴン事情については、単位（気温や度量衡）の表示方法、気候の特徴、WOUの学習環境やカリキュラムなどの情報を与えた。また、アメリカの生活習慣やマナーを学習する時間を設け、公式の場での服装、初対面の人との挨拶のしかた、家庭での食事の形式、といった基礎知識を提供した。旅行準備・渡航手続きに関しては、携行品・プログラム日程の確認のほか、入国カード・税関申告書の記入の指導を行った。

現地の生活にスムーズに溶け込めるようにするには、事前研修で学生に予備知識を与え、心構えを持ってもらうことが重要である。仮に、必要なマナーを事前に教わっていなかったとしたら、現地で失礼な印象を与え、コミュニケーションが円滑に運ばなくなる可能性も出てくる。そうすると、英語コミュニケーション能力の向上という学生の参加動機も満たされなくなるだろう。こうした理由から、今年度も昨年度同様、担当教員が通常授業とは別の時間帯を利用し、エネルギーを費やして事前研修にあたったが、この事前研修は、本プログラムで学生の動機を満たす基盤としての役割を担うものであった。

３．２　支援体制・カリキュラム

英語コミュニケーション能力の向上、異文化理解・体験という学生の動機を満たすもうひとつの基盤として重要なのが、WOUの支援体制である。

研修プログラムはWOUの国際部と学外教育部が展開する事業である。このことは昨年度の本学紀要でも報告されたが、※5 今年度はプログラムの始まる直前に国際部が他の部門を統合するなど、WOUの事務レベルで慌しい動きがあった。しかしながら、プログラム支援体制の基本的枠組は昨年と変わらず、国際部のディレクター（Kelly Mills）指揮のもと、専任のスタッフが5名採用され、支援に当たってくれることとなった。プログラム・コーディネーター１名（Sally Shepard）、英語担当教師　2名（Rita GoodmanとPhillip Dowsett）、学生アシスタント　2名（Brooke SnellingとSayaka Fukahori）である。2名のアシスタント以外は、昨年とは異なった顔ぶれとなった。

研修プログラムのカリキュラムは昨年度の枠組を踏襲するものであったが、前回参加した学生によるプログラム評価（Evaluation）の結果を踏まえ、学外活動が精選された。ただし、精選された学外活動を反映するはずの教材が改訂されておらず、学外活動とリンクするべき授業内容が活動内容と齟齬をきたしている場面がいくつか見られた。コーディネーターや英語教師は、新規採用だったせいか、教材内容に目を通し、学外活動との連携を確認する時間をとれなかったようだ。

しかし、部分的な不備を別にすれば、全体としては充実したカリキュラムが組まれており、大きな問題はなかった。カリキュラムの流れを一瞥すると、次のようである。月曜から金曜までは授業でネイティブ・スピーカーの英語教師と対話したり、アメリカやオレゴン州にまつわる文化・歴史について学習したりする。教室で学ぶだけでなく、学習内容と関わりの深い場所にアシスタントたちと訪れ、英語で説明を聞き、質問をする機会も、適宜与えられる。授業後はアシスタントたちが独自にレクリエーションを企画して、英語を使う状況を設定してくれる。週末はホームステイ・ファミリーのもとに滞在し、英語を使いながら、楽しい時を過ごす。英語コミュニケーション能力の向上と異文化理解・体験を主な動機として参加した学生たちに用意されたのは、以上のような学習環境であった。

３．３　授業

本学における事前研修とWOUの用意した学習環境というふたつの基盤が整った後は、いよいよ現地での授業である。プログラムの大多数の時間を占めるWOUでの英語の授業は、学生の動機を満たす最大の好機となる。

午前（9:00ないしは10:00～12:00）と午後（1:00～3:00）に行われる授業で学生が使用する教材は昨年同様、バインダーに綴じられて初日のオリエンテーションの際に配布された。目次を見るとだいたいの授業内容がわかるようになっているが、大きく分けて、CLARIFICATION, APOLOGIZING, EXPRESSING OPINIONSのように、相手とのコミュニケーションを成功させる技術を教える項目と、MISSION MILL MUSEUM（博物館）、SALEM（州都）、SILVER FALLS（州立公園）、PORTLAND（オレゴン州最大の都市）のようにある場所について学び、実際にその場所を訪問してそれについて報告する項目の2種類が用意されている。また、宿題として、学生には「カルチャー・ジャーナル（Culture Journal）」を書くという課題が与えられる。カルチャー・ジャーナルとはホームステイなどでの異文化体験を英語で綴る日記であり、まさに英語でのコミュニケーション能力と異文化理解というふたつの要素を包含した課題である。

シルバーフォールズ（州立公園）で

英語コミュニケーション能力の向上、異文化理解・体験という動機は、上記2種類の項目を学習することで満たされるはずだが、果たして、ふたつの学習内容はどのように教授されたのか、そして、ふたつの動機はどのように満たされたのか(あるいは満たさなれなかったのか)。カルチャー・ジャーナルの役割と効果も含め、実例をもとに検討してみよう。

３．３．１　実例１　INTRODUCTION／CLARIFICATION／COMMUNICATION STRATEGIES

コミュニケーションを成功させるには、相手とどのように対話を始めるかがポイントとなる。そこで、INTRODUCTIONS（自己紹介）のしかたを学ぶ必要がある。今回、研修プログラムにおける授業では、これに加えてCLARIFICATION（相手の言ったことを理解できなかったときに聞き返し、会話の内容をはっきりさせる）とCOMMUNICATION STRATEGIES（質問をすることによって会話を継続させる）の3つの技術が、初日の最初の授業内で扱われた。授業は2クラス、8名ずつに分かれて行われたが、筆者はRita Goodman担当の授業を参観した。

教材にはINTRODUCTIONをするときの注意点が説明されている（以下に抜粋）。授業は、学生が順番にその説明を朗読することからスタートした。教師は学生が１パラグラフを読み終えるごとにわからない単語の意味はないかたずね、読まれた説明に対する補足を行った。そこで特に強調されたのは、confidence（自信）を示すことである。それは、アイコンタクトをとることや、相手の手をしっかり握って握手をすることによって示される。このことについて予め知っていた学生にはどうということのない話であるが、知らなかった学生にとって、自己紹介の際にアイコンタクトや握手が重要であると学んだだけでも、コミュニケーション能力の向上への第一歩として役立ったと思われる。特に、上記２．３の（４）で触れた、「苦手意識から、積極的になれない」者にとっては、知識として有益だったであろう。教師による補足説明の後、実際に全員の学生が自己紹介のロールプレイを行い、アイコンタクトのとり方や握手のしかたはそこで確認された。

INTRODUCTIONS

In order to have enjoyable communication experiences it is often important to make a good first impression. You can do this by introducing yourself and others in a strong, confident, and friendly manner. Try some of these strategies:

INITIATE THE INTRODUCTION
MAKE EYE CONTACT
MAKE A FIRM HANDSHAKE
SAY YOUR NAME CLEARLY AND SLOWLY
LISTEN CAREFULLY FOR THE OTHER PERSON'S NAME

（WOU教材*Summer English Program*、6頁）

次にCLARIFICATIONであるが、リスニング能力の十分でない学生にとって、相手の言っていることがわからない場合に聞き返す技術を身につけておくことは重要である。教材にはいくつか、聞き返しの例がダイアログの形で示されている。

CLARIFICATION

A: My name is John.
B: ***Pardon me, could you repeat that?***

A: Her daughter's name is Cara.
B: ***Could you spell that please?***

A: He is a doctor.
B: ***Excuse me, what did you say?***

A: He lives in California.
B: ***I'm sorry, could you say that again? / Could you please say that again?***

（WOU教材*Summer English Program*、8頁）

Johnを聞き取れない学生はいないので、教師もそのあたりは機転をきかせ、長くて複雑な名前に変えて例文を説明した。説明のあと、教師がAを、学生がBを担うかたちで、全員がロールプレイを行った。

Could you～は、依頼文としてよく使われる表現であるため、事前研修の段階でも、われわれの側から簡単な説明を行っていた。もとより、英検3級程度の知識がある者なら知っているはずの表現である。だが、知識として知っているのと、実際に現地で使ってみるのとでは、大きな違いがある。そういった意味で、現地でネイティブ・スピーカーからこのような指導を受けることは有益であり、コミュニケーション能力向上の一助になったと考えられる。

滞在期間中、ある学生が、could youという表現からcanの過去形としての意味（～できた）を連想してしまうのだが、それは間違いなのか、という疑問を投げかけてきた。以前に覚えた知識が邪魔をして、なかなか納得してこの表現を使えないでいるのである。Couldが過去形なのは、現在から見て過去が遠くにあるという意味で相手との距離感を出し、依頼における丁寧さをより強調するためである、という説明をしたが、このように、学生が現地で実際に使われている表現に触れて、今まで習ってきた知識とのズレを認識し、修正していくというプロセスも、海外研修がコミュニケーション能力の向上のうえでもたらす効果のひとつである。

授業の最後に取り上げられたのは、COMMUNICATION STRATEGIESである。アメリカで他者とコミュニケーションをとるには、質問の技術を学ぶ必要がある。そのことによって、会話を発展させることができるからである。ただし、闇雲に質問をすればいいというわけではないので、相手に投げかけてよい質問と、失礼にあたる質問というものがある。教材にはいくつかの質問が並べられ、それぞれに対してsafe（してもよい質問）なのかunsafe（失礼にあたる質問）なのか、チェックする欄が設けられている。教師はこの教材にしたがって、アメリカではこの質問は大丈夫、この質問は失礼、という説明を行った。これから週末のホームステイを控えている学生にとっては、安全な質問と危険な質問の区別をつけるよい機会であり、ひいては、コミュニケーション能力の向上に役立つものでもあった。

３．３．２　実例２　DOWNTOWN INDEPENDENCE ACTIVITY

３．３．１では、主にコミュニケーションを成功させる技術に関しての授業を紹介したが、異文化理解・体験に関わる授業についても見ておくことにする。ここで取り上げるDOWNTOWN INDEPENDENCE ACTIVITYとは、WOUのあるモンマスから程近いインディペンデンスという町へ出かけ、さまざまな店を訪ねて取材するというミニ・プロジェクトである。インディペンデンスでは、「テイラーズ・ファウンテン・アンド・ギフツ」という昔懐かしい装いのカフェで昼食をとることになっていたので、前日の授業でカフェのメニューを見ながら、食事の注文のしかたについて指導がなされた。教師はいくつかのメニューに関してどのような食べ物なのかを説明し、学生から耳慣れない単語について質問が出ると、それに解答した。次に、学生が各自ひとつずつ、何を注文するかを決め、値段を調べて教材のなかの規定の欄に書き込んだ。その後、教師自らが店員に扮し、ひとりひとりから注文をとり、支払いを受け取るというロールプレイが実践された。

テイラーズで食事の注文

翌日、アシスタントの運転する車で学生たちはインディペンデンスへ出かけた。2人の教師が8人ずつのグループを引き連れていくつかの店舗（工具店、電気製品店、喫茶店、動物病院、アトリエなど）をまわり、学生に質問を促した。筆者はPhillip Dowsettが引率するグループについてまわった。各店舗ごとに学生たちが順番に店員に質問して、説明を受けた。それが済むと、予定通り「テイラーズ」で昼食となり、学生たちはそれぞれ自分の注文したい品を注文した。

さらに翌日の授業では、インディペンデンスでの活動報告（Debriefing）が行われた。学生たちは前日の取材に基づいて、どの店に行ったか、どの店が気に入ったか、などについて報告しあった。

このようにして、実際に店舗をまわり、商品を見たり食事をしたりすることは、異文化理解・体験という意味で有意義だと考えられる。ふだん日本で見慣れている店と同じ点、異なる点を意識するからである。例えば、電気製品の店を訪れた学生からは翌日の活動報告で、「メイド・イン・チャイナの製品があって驚いた」「アメリカの冷蔵庫は大きい」などの意見が出され、アメリカという国の生活実態を目の当たりにした様子が伺えた。

日本にALT（Assistant Language Teacher）として滞在した経験のあるプログラム・コーディネーターも言っていたことだが、アメリカでは、店員と顧客とのコミュニケーションが濃密である。食事をしている最中にも、どうですか、と話しかけてくる店員が多い。このミニ・プロジェクトで訪れた「テイラーズ」を始め、研修期間中、学生たちはさまざまな場所で食事をしたが、その際、そのような飲食文化の違いを意識したはずである。こうしたことから、インディペンデンス探訪、「テイラーズ」訪問というミニ・プロジェクトは、異文化理解・体験という学生の研修参加の動機を満たしてくれる授業であったということができる。

３．３．３　実例３　MISSION MILL MUSEUM

実例１、２の授業は概ね、学生の動機を満たすに値するものであった。しかし、手放しで喜んではいられない場面もいくつかあった。例えば、MISSION MILL MUSEUMという歴史・産業博物館を訪れるミニ・プロジェクトの授業だ。

MISSION MILL MUSEUMは、州都セイラムに位置する。そこでは、メソジスト教徒Jason Leeが率いた宣教グループ（MISSION）のセイラム移住・建設の歴史と、Thomas Kayがその地

で始めた織物工場（MILL）における産業技術発達の歴史というふたつの歴史を学ぶことができる。敷地内には、ジェイソン・リーや牧師たちが生活した家（The Jason Lee House）、トマス・ケイが1889年に建てた羊毛工場（The Thomas Kay Woolen Mill）が原形を留めており、訪れた客はその中を巡回することができる。また、牧師たちの生活用水や、工場における水力発電の発達など、水の使用が重要であったことも、この博物館で知ることができる。このようにMISSION MILL MUSEUMは、オレゴンの歴史、産業、生活文化といったあらゆる側面を体現しており、教育資源として非常に価値の高いものとなっている。

この教育資源を生かすためには、学生は次のような授業を受けるのが理想である。まず、この博物館が発行しているパンフレットを読み、語彙や表現をチェックしながら、博物館の成立の経緯や特徴について学ぶ。次にビデオ（20分程度）を鑑賞し、その内容を教材で細かくチェックする。さらに、当日訪れた際に見るべきポイント、館員の方の説明を聞くのに知っておくべき語彙などを予習する。予習を終えたら、実際に訪問し、館内をまわって館員からの説明を聞いたり、自分なりの視点で展示を観察したりする。さらにその次の日の授業では、見たり聞いたりしたことを英語でまとめ、報告を行う。

ところが残念なことに、プロジェクトはこの流れに沿って行われなかった。ビデオの鑑賞はしたものの、内容のチェックは行われず、教師によって概略が説明されるにとどまった。パンフレットも用意されなかったので、学生たちのなかには、博物館でいったい何を見てくればよいのかとまどっている者もいたはずである。結果として学生はほとんど何も学ばないままただ博物館を訪れ、館員の説明を聞いておみやげを買い、キャンパスに戻った。

教師は翌日、もう一度ビデオを見せて説明を行ったが、学生は常に受身の態勢に置かれ、博物館見学によって自分たちが何かを学び取ったというほどの成果を上げることはできなかった。結果としてこのミニ・プロジェクトは、必ずしも、異文化理解・体験という動機を満たす授業とはならなかった。オレゴン開拓の歴史や織物産業の発達など、学ぶべき事柄が数多く含まれていた分、パンフレットの配布、ビデオのチェック、新しい語彙の確認といった、よりきめ細かい準備が必要だったと思われる。

今も原形をとどめる織物工場

館員の説明を聞く学生たち

メソジストの住んだ家の前で

３．３．４　カルチャー・ジャーナル

学生たちは、これまで述べてきた授業や学外活動のほか、ホームステイ等を通じてネイティブ・スピーカーとの対話を積み重ねるが、アメリカにやってきたからといって突然難しい表現を使えるようになるわけではない。ネイティブ・スピーカーの英語を聞いて、あれはどういう意味だったのだろうと考え直したり、自分の使った英語はあれでよかったのかと反省したりするプロセスを経て初めて、表現能力の向上が見込める。カルチャー・ジャーナルは、そういった「反省」の作業を促してくれる課題である。そしてそのような「反省」は、自分がその日にどのような異文化体験をしたのか、客観的に捉えなおす機会ともなる。

ジャーナルを提出すると、教師が添削のうえ、コメントを付して返却してくれる。他者の視点から評価されることで、自分の使っている英語や異文化に対する意識が修正されていく。この「修正」もまた、英語での表現能力向上のために欠かせないプロセスである。

通常、アメリカの大学では基礎科目としてEnglish Composition（英作文）の授業が設けられているが、作文能力向上のためにjournal（日記）の執筆を勧める教師は少なくない。学生たちはカルチャー・ジャーナルを書く作業を通じて、アメリカの大学で行われている教育を部分的に経験したといえよう。学生にとって毎日、英語でジャーナルを書く作業は大きな負担だったようだが、音を上げるものはいなかった。むしろこの経験をきっかけにして、帰国後、英作文の練習を始め、毎週筆者に提出する学生も現れたほどである。カルチャー・ジャーナルという課題は、学生の研修参加動機を満たすばかりでなく、その後の彼らの英語学習にとっても良い契機となった。

現地での異文化体験執筆という経験は海外研修でなければできないことである。それゆえ、カルチャー・ジャーナルはWOU研修プログラムの授業のなかでも非常に意義深い課題だということができる。

３．３．５ 授業についてのまとめ

WOUでの英語の授業は、実例１・２やカルチャー・ジャーナルに代表されるように、英語コミュニケーション能力の向上と異文化理解・体験という動機に答えてくれるものがほとんどだった。ただ、実例３のように、準備が不十分で、教師があっさりと説明して終わりという授業の場合、学生は常に受動的な立場に置かれ、当初の動機を満たしてはもらえない。特に、上記２．３の（１）や（３）で触れた、積極的にコミュニケーションをとろう、異文化を理解しようという姿勢を持っている学生にとっては、自分の積極性が生かされずに終わるため、教育的効果が上がったとは言えないところも出てくる。今回の実例３のように学生の動機を満たさない授業が今後、見受けられた場合には、本学の研修担当教員がWOU側に要望を出し、改善をはかる必要があろう。研修プログラムの始まる前にWOUのスタッフと密に連絡をとり、授業内容の水準維持に努めなければならないのはもちろんだが、授業の実態は、実際に参観してみなければ予測できない部分もある。もし、参観した授業内容が満足のいかないものであったとしたら、研修担当教員は現場で雇用されている英語教師と率直に意見を取り交わし、授業内容を修正してもらうよう説得しなければならない。

３．４　現地アシスタントとの交流

ハッピーバースデイ！

海外研修においては、現地の学生と直接交流することができるという利点がある。今回も、前回同様、Brooke SnellingとSayaka Fukahoriという2名のWOU学生アシスタントが研修プログラムをサポートしてくれたが、現地のアシスタントと英語を使って会話することは、英語コミュニケーション能力の向上、異文化理解・体験という点で重要な意味を持っている。

WOU学生アシスタント2名の仕事は、その日の日程表の配布、学外活動への同行（自動車での学生移送も含む）と写真撮影、学生の相談受付など多岐にわたる。学生たちと三食をともにし、会話を楽しいものにするのも仕事のひとつである。これらを通じて、アシスタントは参加者たちと交流をはかり、英語でコミュニケーションをとって、研修をより意義深いものにしてくれる。

午後3時に授業が終了し、その後特に公式の予定がない場合、夕食後にアシスタントがレクリエーションを企画して学生を楽しませてくれるが、今年はオリンピック・イヤーでもあり、寮に隣接するラウンジでテレビ観戦する時間もとられた。その他、DVDによる映画鑑賞やティー・パーティー、学生のバースデイ・パーティーなどのレクリエーションが実施された。また、学生によっては、夜遅く個人的にアシスタントのもとを訪ねて会話に興じた者もいたようである。本来、そのような時間帯に個別の訪問に応じることは仕事としての領域を超えるが、ふたりのアシスタントは快く、任務外の事態にも対応してくれた。

ただし今回の研修では、あまり目立たないが、真剣に考えておくべき問題があった。それは、アシスタントがいるそばで、学生どうしが日本語で話をしてしまう場面が見られた、ということである。英語コミュニケーション能力の向上という動機を満たすなら、学生たちは、アシスタントと時間を共有しているあいだは、自分たちも英語で会話する努力をするべきだった。なかにはそのようにしている者もいないわけではなかった。だが、友達どうし日本語で会話する方向に流れていってしまう場面を見かけることが少なからずあった。自分たちの動機を満たすチャンスを自ら潰してしまう格好である。アシスタントのふたりがそのことに気づき、われわれ教員サイドも同様の認識を持ったので、※6日本語で話している光景が目に余る場合は英語を話すように促したが、徹底して改善させるには至らなかった。さらに言えば、学生はアシスタントを、英語を使って交流をはかるべき存在というよりも、身のまわりの世話をしてくれる人、と捉えてしまっているような節もあった。

こうした事態を避けるためには、事前研修の段階で、アシスタントの意義と役割を明確に伝え、アシスタントといるときにも英語でコミュニケーションをとるように、予め指示を出しておく必要があろう。また、英語で話すべき状況で日本語を使うのは失礼なことでもあり、礼節の問題として教示しておくことも肝要と思われる。

もっとも、このような問題はぜいたくな悩みであるのかもしれない。アシスタントといるときも英語で、などという話が出るのも、アシスタントのふたりが十二分にその役目を果たしてくれているからであって、その意味で、われわれはアシスタントに恵まれていた、と言わなければならない。他大学の海外研修では、アシスタントがほとんど仕事らしい仕事をしない、といった話も聞こえてくる。そういう場面では、アシスタントがいるときは英語で話しなさい、といったことすら言えない。

アシスタントたちの頑張りによって、当然ながら、よい結果も得られた。例えば、最初のころはアシスタントとあまり目を合わせようとしなかった学生が、研修も終わりのころになって、アシスタントに用事を頼みに行ったということがあった。これは、アシスタントが粘り強く学生と接し、英語で語りかけていった努力の賜物である。

このように、小さな問題はあったものの、今回の海外研修では前回に引き続き、現地のアシスタントが学生の参加動機を満たし、研修の教育的効果を上げる原動力の一部となってくれた。ふたりのアシスタントは、自分たちも非常に楽しい時を過ごし、次回の研修にもアシスタントとして参加したいものだと言ってくれている。だが実際問題として、彼女たちは2005年にWOUを卒業する予定であり、次回の研修ではお目にかかれない可能性が高い。次回以降は、また新しいアシスタントを迎えることになるだろう。本学の英語海外研修を継続していくうえで、その時々のアシスタントとどう関わっていくかは、今後、大きな課題となる。

アシスタントのサヤカとブルック

３．５　ホームステイ

研修期間中、週末ごとに、学生たちは計3回のホームステイを行う。昨年度の紀要でも報告されたとおり、WOUによるホームステイのセッティングは経験に裏打ちされた確固たるものである。※7今回も前回同様、事前に提出してあった参加学生の情報にもとづいて、受け入れ先の選定が行われた。

現地アメリカでの生活をもっとも身近に体験できるのがこのホームステイである。積極性さえ持てば、コミュニケーションのチャンスはいくらでもある。また、アメリカの家庭生活を体験することにより、文化の違いを意識する機会がふんだんに与えられる。そういった意味で、学生の研修参加への動機を最も満たしてくれるのがホームステイだということができる。

学生から聞いた体験談を紹介すると、例えば、一族再会（Family Reunion）の席に招かれた、という話があった。これは、アメリカでは日本以上に家族の絆を大切にする、ということを実感できる体験である。また、出された料理はピザに、水かコーラ、ないしはルート・ビア（いくつかの植物の根から作られる、コーラに似た味のノンアルコール飲料）だった、という話もあった。残念としか言いようがないが、これも考えようによっては、アメリカ食文化の貴重な体験である。あるいは、天ぷらを作るのに買い物に行ったら、置いてある食材が日本と違うので苦労した、アメリカの子供たちのあいだで日本の漫画のキャラクターが人気だ、などのエピソードも耳にした。

研修最終日のフェアウェル・パーティーで、学生たちはホストファミリーと同じテーブルに座り、食事をしたが、そこで同席させていただいたあるホストマザーは、受け入れた学生たちに、パンの食べ方を教えたことを語ってくれた。日本では多くの人がパンにかじりつくが、そうではなくて、手でちぎって食べるのが欧米流だ、ということである。そのことについて教わった学生たちは、まさに異文化を生で体験することができたわけだ。たった3回のホームステイだったが、そのホストマザーは、学生たちからとても慕われ、学生たちも別れがつらそうであった。

フェアウェル・パーティーでホストファミリーと食事

パーティーでの出し物は大好評！

ホームステイ先で、学生たちはさまざまな場所に連れていってもらい、ファミリーとの交流をはかった。もちろん、習慣の異なる国で新しく出会ったばかりの人と生活するのであるから、心理的・体力的にきつい面もあっただろう。だが、それを差し引いても、コミュニケーション能力の向上、異文化理解・体験という動機を満たすのに、ホームステイは研修プログラム中欠くことのできない貴重な役割を果たした、ということができる。

4　学生による評価

上述したプログラムの内容は、概ね、学生たちの当初の動機を満たすものであった。これについては、学生自身によるプログラムの評価からも伺い知ることができる。

学生には、WOU側が授業の最終日に実施する授業評価（Evaluation）、帰国後提出するレポート、レポート提出後に課されたアンケート評価の3回にわたり、研修プログラム全体を捉えなおす機会が与えられた。そのうちレポートとアンケートは、帰国後、研修を客観的に振り返りながら作成されたため、学生の正直な意見が反映されたものとなっている。

英語コミュニケーション能力の向上という点については、多くの学生が、研修参加で得た経験を前向きに捉えている。レポートには、「今まで学んできた英語を、もう1度見直すことができた」「実際アメリカで生の英語に触れてみて、文法とかめちゃくちゃでもなんとか通じるということを知った。積極的に話していくことの方が大切だなと思った」などのコメントがあり、アンケートには、「英語を楽しく勉強できるようになった」「自信がついた」「積極的になった」「無反応が一番悪い、積極的に話そうと思うようになりました」「英語を話すことにためらいを感じなくなりました」「英語に一層親しみを持てたことで、授業や自主勉強に対する意欲も増大した」などの回答があった。こうしたコメントや回答から、学生たちは一様に、英語でのコミュニケーションに対する意識や姿勢を改善させたことがわかる。今回の研修によって、英語でコミュニケーションをとる能力を向上させたいという学生の動機は十分に満たされ、学生自身の英語学習への取り組みにも大きな変化がもたらされたといえる。

興味深いコメントとして、「初のホームステイ体験を通じ、自身の英会話力のなさを痛切に感じ、話すことが嫌になってしまったときもありました」と正直に告白しているものがあった。だが、その同じページには「今回の研修すべてのプログラム、プログラム外のことを通じ、自分の英語への気持ちの変化はもちろん、責任感や思いやりなど多くのことを身につけることができたと思います」とも書かれており、現地での生活のなかで成功と挫折をくり返しながらも最後には自身の経験を肯定的に捉えている様子が伺えた。このように、自分の培ってきた英語力と現実とのギャップを感じ、英語についての姿勢を変化させた、というのも、研修参加によって学生自身が成長を遂げたことの証である。※8

異文化理解・体験という点に関しても、レポートを読む限り、ほとんどの学生が満足している。３．３．２で触れた飲食文化の違いについては、「何もかもがビッグサイズでした」「ボリュームがある」など、多くの学生が驚きのコメントを寄せている。３．５で触れた家族の絆についても、複数の学生が「家族や親族の交流を大切にする」「家族の絆が強い」などの感想を述べた。

また、「もっと自分の国日本のことを知っておかなければならないと思いました」「これから英語圏の人と交流する際には、もっと日本のことを日本人である私が知っていなければならないと思いました」など、自国を振り返る契機として異文化体験を捉える向きもあった。さらに、コンサートや野球観戦で体験した国歌斉唱・国旗掲揚に触れ「アメリカの人々はみなアメリカに誇りを持っていることを強く感じた」「日本ではどうだろう、と愛国心について考えさせられた」などと述べた者もあった。政治思想とは関係のないレベルで、現地での生活から国や愛国心について考えるきっかけを得たことは、学生たちのなかでも大きな異文化体験であったようだ。

アンケートにおいても、ほぼすべての学生が、期待通りの、あるいは「期待以上」の異文化体験ができたと回答しており、事前に記入してもらった「希望理由書」に見られた学生の研修参加の動機は、研修を通じてほぼ満たされたということが確認できた。

オレゴンシンフォニーのコンサート会場で

野球観戦で国歌斉唱を体験

5　本学の担当教員の役割

ここまで、学生の参加動機が満たされる過程について詳述してきたが、最後に付け加えておかなければならないことがひとつある。学生の動機を把握し、それを満たしていくことが英語教育としての海外研修の意義であるとするなら、研修に関わるすべての面において、本学研修担当教員に多大なる役割と責任が課せられる、ということだ。

担当教員は、春先からWOUのスタッフと連絡を取り合い、契約内容の再検討やプログラムの計画・修正などを行う。また、研修について学生に告知し、募集をかけ、説明会を開く。事前研修の実施が重要であることはすでに述べたが、現地の施設・設備が契約どおりになっているか逐一チェックしたり、上記3で詳しく見たように、授業内容が適切かどうかを見極め、場合によってはその場で現地スタッフとの交渉に臨むなど、現場で求められる事柄も多い。学生の自己規律を促したり、安全面に配慮したりと、挙げていけばきりがないほど多くの仕事がある。

夏季英語研修を本学の教育プログラムの一環として毎年成功させていくには、担当教員が相応の努力をしなければならない。教員はただの引率者ではなく、まさに本研修を英語教育プログラムとして遂行するのに表で裏で骨を折るのであって、上記2～4で述べたすべての事柄に、その仕事の責任が及んでいる。このことを忘れてはならないだろう。

6　おわりに　―全体のまとめと展望―

本稿では「英語教育プログラムとしての海外研修」という視点から、今回の夏季英語研修がどのような役割を果たしたか、できるだけ具体的な事実に即して述べてきた。「英語でのコミュニケーション能力の向上」「異文化理解・体験」という学生の参加動機を満たすことが教育プログラムとしての本研修の目標であったとすれば、授業、アシスタントとの交流、ホームステイ等を通じて、その動機は満たされたというに十分であり、レポートやアンケートに記された学生の評価もそれを傍証してくれている。結果、第2回夏季英語研修は、英語教育プログラムのひとつとして、成功裡に終わったといえよう。

研修は次年度以降も継続される予定であるが、学生の参加動機が年ごとに大きく変わらないとするなら、第1回、第2回と同様のプログラムを用意し、実行していくことにより、今後もそれなりの成果をあげることができると考えられる。

ただし、スタッフの変更（現地の英語教師、アシスタントなど）によってプログラム内容の引継ぎがうまくいかないなど、今回の研修で垣間見えた懸案事項もいくつか存在するので、研修をめぐる状況は予断を許さない。第1回、第2回を通じて獲得した成果を生かすには、そうした懸案事項を予防・修正していく必要がある。また、本学が（新）富山大学芸術文化学部に移行する際、本研修を新学部の教育プログラムにどのように位置づけるのか、WOUとの大学間協定をどう発展させるのか、といった点についても、根本的な検討が必要となろう。今後、WOUと本学が協力して、より一層厚みのある体制を整えることが期待される。

注釈

※１　本稿の文責は深谷にあるが、学科「特別講義（英語海外研修）」専攻科「海外研修」担当責任教員として、現地で授業と学外活動に参加された小林教授に本稿の通読を依頼した。その際、われわれのあいだで授業や学外活動に関する評価が分かれた場合、その旨を本文中に明記することで合意している。
※２　研修期間は2004年8月18日から9月13日まで。尚、WOUとの友好協定締結については『高岡短期大学紀要』VOL.18　2003に、第１回夏季英語研修については『高岡短期大学紀要』VOL.19 2004に、詳細な報告があるので参照されたい。
※３『高岡短期大学紀要』VOL.19 2004、5頁。
※４　コミュニケーションや異文化理解への姿勢のあり方は、個々が形成してきたパーソナリティに関わるところも大きいが、ここでは措く。
※５『高岡短期大学紀要』VOL.19 2004、8頁。
※６　学生たちも自覚してはいたが、精神的・肉体的な疲労から、「英語で話そう」と自分たちの気持ちを駆り立てることができなかったようだ。後日提出されたレポートには、「授業以外の場でももっと日本語ではなく英語で話すべきではなかったのか」など反省の弁を述べるものもあった。
※７『高岡短期大学紀要』VOL.19 2004、13頁。
※８　これは、本文２．３の（２）で触れたような学生（「苦手意識はないが、そこで満足し、積極的にならない」学生）が、現地で英語を使いながら、自分の実力とのギャップに気付いて、英語への姿勢を改めたというケースに近いだろう。

An Evaluation Report on WOU Summer English Program 2004

Kiminori FUKAYA

ABSTRACT

Takaoka National College carried out its second overseas intensive English program at Western Oregon University from August 18 to September 13, 2004. Since it is counted as one of TNC's important educational plans, this report aims to analyze and evaluate 2004 program by focusing on its value as English Language Teaching. Whether the program was successful or not depends on how much participants' learning objectives were satisfied. In 2004 program, although there were several points that should be revised in the future, participants' goals were mostly achieved through TNC's preparatory guidance, WOU's support for learning, instructions in class, and various activities including homestay. This proves that TNC's overseas intensive English program is highly effective as an educational plan. In the following years, the program would be developing and much more improved to maintain its quality.

KEY WORDS

English Language Teaching, overseas intensive English program, Oregon, preparatory guidance, instructions in class, out of class activities, student assistants, homestay